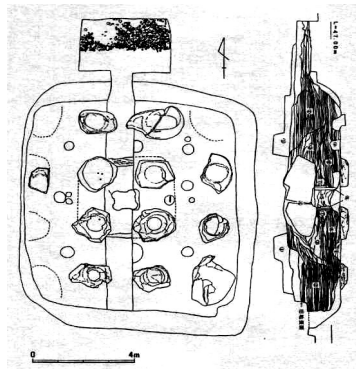


香芝市尼寺の尼寺廃寺跡では、基壇や礎石が残り、瓦も多く出土していたことから寺院跡の存在が考えられていた。1995年から12年度にわたって香芝市教委が調査を行い、平成7年にこの基壇から、巨大な地下式の心礎が発見され、一躍注目をあびた。

調査の結果、中心伽藍は東向きの法隆寺式伽藍配置で、北に金堂、南に塔が配置され、周囲を東に中門が設けられた回廊が巡っていた。中心伽藍の範囲は南北約7.1m、東西約4.5m。一辺約13.6m四方の塔基壇から、長さ・幅とも3.8mの巨大な地下式の心礎が検出され、その柱座からは耳環12，水晶玉4，ガラス玉3，刀子1からなる舍利荘嚴具が出土した。

この古代寺院は、塔の瓦の型式や唐尺使用の可能性から明日香時代の7世紀後半に創建され、平安時代初頭の9世紀から10世紀に焼失したと考えられる。



発掘された  
塔基壇の  
巨大心礎

## 聖徳太子創建七大寺のこと

「太子創建の葛城尼寺か、100年に一度の大発見」(朝日新聞) 「法隆寺上回る飛鳥時代最大の塔跡発掘 聖徳太子建立か」(毎日新聞) 「法隆寺しのぐ五重塔跡 聖徳太子ゆかりの寺か」(読売新聞) 「金の耳飾りなど続々 聖徳太子が建立？」奈良新聞

平成8年4月11日、各新聞社は尼寺廃寺塔跡の、巨大心礎発見を大々的に報道した。見出しに踊る聖徳太子や葛城尼寺の文字は、世の聖徳太子ファンの関心と期待を大いに集めたのである。

法隆寺の古資料に、法隆寺、四天王寺、中宮寺、橘寺、広隆寺、法起寺、葛城尼寺の七カ寺が聖徳太子が関わった寺としてあげられている。このうち所在が不明なのは葛城尼寺だけで、土地の名前が「尼寺」ということもあって、この時は法隆寺管長の高田良信氏などもこの説を主張しておられた。

ところが発掘調査が進むにつれ、出土瓦などからこの寺の創建年代が7世紀後半とされ、622年に亡くなった聖徳太子の葛城尼寺とするには年代が合わないことが分かってきた。

これに対して、当初から敏達天皇系の「茅渟王」の一族が、この寺の創建に関わったのではないかという説がある。茅渟王は皇極(斉明)天皇の父で、天智、天武には祖父にあたる人物、現在の香芝市の北部は茅渟王系の一族と深いつながりを持っており、今はこの説が有力のようだ。

## 斑鳩の工人集団

では、まったく聖徳太子と係わりがないのだろうか。他には見られない巨大な塔跡の心礎や、心柱の形態が、法隆寺前身の若草伽藍と同じ八角の心柱で共通するなど、法隆寺との繋がりは否定できないことも事実である。それにここは斑鳩に近い。残された痕跡には何等かの形での聖徳太子との繋がりが考えられるのである。

この寺は斑鳩地域の工人集団の技術が採用されて造営されたのであろう。斑鳩地域は明日香と並んで我が国で最も早く寺院建築が行なわれたところで、おそらくは法隆寺を手がけた技術者集団は太子が亡くなり、上宮王家が滅んだ後も斑鳩にいたはずである。高い技術を持っていた彼らは、明日香から奈良時代の各地の寺院建築に関わったのである。斑鳩に近い片岡の地に建てられた寺院に、彼らが若草伽藍と同じ形式の心柱を持つ五重の塔を建てたととしても、それは十分に考えられることではないか。